

# 凌辱エロゲの清掃員

怪異犯罪特殊清掃班

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

凌辱エロゲとかで怪異に性的に襲われた後の事後。

粘液や体液で汚れた床や壁、壁に付着している卵や子供、触手に辱められた女性たち。

その処理は誰がしていると思いますか？

これはそんな事後現場を処理する清掃員新人の男と退魔師の少女たちの物語

目次

八尺	42
休日出勤	20
仕事始め	1

## 仕事始め

「はあ… はあ… 暑い…」

湿っぽい下水道。

僕達を避けるように床をネズミやらゴキブリが闊歩し、周りの外壁はヘドロのような黒っぽい何かがへばり付いている。

そんなでもって、防護服とガスマスクを着けているので殊更暑い。

「しようがねえだろ… 文句を言うならこんなところに巣を作った妖に言うんだな。」

「す、すみません…」

隣でガタイの良い防護服の男が俺の肩を小突いた。

内藤チーフ。

彼は俺の先輩にあたる人物であり、ちよつと厳しい人でもある。

まあ、僕自身新人だからしょうがないし、現場責任者であるから当然なのだが。

僕の他にも後ろには3人くらい同じ防護服を身にまとっている人たちが居る。

同僚だ。

手には各々モップやらバケツなどの清掃道具を持っていた。

そして、僕の手にはなんか液体窒素とか入れる容器みたいな形状をしたドラム缶みたいな奴を運ぶ台車。

色々入れる都合上、帰る頃には一番重くなっている荷物だ。

新人だから持たされたのだろう。

埃塗れの道を暫く歩いてみると、前方を歩いていた先輩が足を止めた。

「現場はここだな…」

「うわああ…」

前方に広がる景色。

それはあまりにも気持ちの悪い物だった。

身体の節々にヘドロがへばり付いた河童とのつぺりとした胴体の下水道の通路に詰まるんじゃないかと思う程大型の亜人のような妖

が四肢をバラバラに裁断されてそこらに転がっている。

そして、それだけじゃなく何やらカエルの卵のような塊が壁面にびっしりとへばり付いており、そこに返り血がべっちょりとかかっていた。

そして、そこらへんに打ち捨てられた女性たち。

着ている服や年齢層からバラバラなので、無作為に女性を集めていたことが分かる。

正直、見ていて気分の良い物ではない。

しかし、この光景も二度目だった。

それに様子を見るに、どの妖もきつちりトドメが刺されていた。

それだけこの巢の対処を行った退魔師が優秀だったということだろう。

「吐くなよ、葦矢。いちいち吐いていたらキリがねえぞ。」

「大丈夫です…。ちよつと見ていて気分の良い物ではないですけど…。吐いたりはしません。」

先輩が僕に声を掛けてくれる。

そんな先輩の言葉に答えると、先輩は俺から視線を外して後ろの人たちにも声を掛ける。

「それじゃ、俺と坂本が壁面洗浄。高町がその女性の調査。そんなもって中鉢が壁面に着いた尻子玉の除去と保存。葦矢、お前は妖の遺骸サンプルの運送だ。それとお前は新人なんだから俺達の作業を見て、分からない所があれば質問しろ。お前らも、出来る限り答えてやってくれ…。それじゃ、作業に取り掛かるぞ。」

「は…。はい！」

先輩は慣れた様子で指示を出す。

僕はそんな先輩の指示に従って、手元の容器を地面に置いて蓋を開いた。

他の人も各々自分の作業に取り掛かろうとしている。

この世界には妖という異形の存在が居る。

人間社会と秩序を守る退魔師も。

そして僕達はそんな退魔師の戦闘などの事後処理を行う清掃人な

のだ。

「…これは…陰性か。」

先輩たちの作業を見ているように言われた僕は高町先輩の作業を拝見させてもらっていた。

しかし、その作業が下腹部の…その…女性のアレに何か計器を差し込んでその数値を見て紙に残している。

正直、見ていてその…危ない絵面してるけど…。

「それ…何してるんすか…？」

僕が尋ねると、高町先輩は顔を上げて俺に答えた。

「河童だけならほぼ必要はないだろうが…淀坊主が居たからな。受精したかどうかを調べている。」

どうやら僕が見ていた通りの意味があつたようだ。

しかし、受精してたらどうするのだろうか？

「受精してたら…どうなるんですか？彼女達。」

僕が聞くと、高町先輩は少し黙る。

しかし、ゆつくりと言葉を続けた。

「妖を孕んでいなければ膣洗浄して記憶処理して解放だ。ただ、受精している場合は…焼却処理だな。多くの妖を生む母体だし、新たに妖によつては種を植え付ける際に母体を変化させる場合もある。身体を残すと危険な場合があるからな。」

「そう…なんすか。」

先輩が来る前に言っていたのは、今回の現場はそもそも女性の無差別失踪事件についての調査の結果行き着いたらしい。

なんでも妖は河童で下水に生息しており、女性を通った際にマンホールから手を出して下水道へと引き込んでいたとか。

つまりは彼女たちは理不尽にもこうなってしまうているのだ。

その末に焼却されるなんて…とてもやるせない。

「まあ、どちらにせよ肉体の処遇については俺じゃなくて、中鉢の方の案件によるけどな。」

「尻子玉…ですか？」

「ああ。河童は人間の尻から尻子玉…。つまりは魂を術で固形化したものを取り出して卵鞘に括りつける。そうすることで卵を育てる為の栄養にするんだ…。つまり、受精してなからうと尻子玉がすでに絞りカスになってたら結局のところ火葬されるのさ。」

見ると中鉢先輩は蛙の卵のような物を掻き分けて、丁寧な手つきで白い塊を取り出す。

その塊は完全な球というわけではなく、顔や足などが浮かび上がっているように見える。

離れから見れば球状に折りたたまれた手のひら大の女性たちにも見えた。

正直、気味が悪い。

… サイズ差があるということとはそういうことだろう。

「河童は残った身体を性処理に使うからな。そういう意味では胎生の淀坊主と共生するのも珍しくないだろう…。というわけで、残った身体使いたいから引き取らせてくださいっていうのは無理な相談だぜ？そもそも妖の体液は酸性の場合もあるからチ○コ刺した瞬間溶けたりするかもしれないな。」

「なっ、そ、そういう意味で言ったんじゃないですよ!!」

そんなつもりで聞いたわけじゃないと言うも、先輩は分かっている分かってると俺の肩を叩くばかり。

まあ、冗談だろう。

それにしたって人間きの悪いことを…。

これだから少しこの職場は苦手なのだ。

「おい！何と太話してる。質問は許したが、私語を許した覚えはないぞ。」

「へへっ、チーフすんません。」

「す、すみませんでした!」

高町先輩は、悪びれずに内藤チーフに謝っている。

対照的に、僕はしっかり謝っていた。

高町先輩は内藤チーフとも今まで一緒に仕事してきただろうし、そもそも仕事してるしな。

新人である僕が同じような態度を取るわけにはいかないだろう。

「俺も今からサンプルを容器に詰める作業を行う。お前もやれ。」

「わ、分かりました……！」

チーフに言われて、首を縦に振る。

容器の方へと向かう前に、高町先輩に向き直った。

「色々、教えて頂きありがとうございますございました！」

「おー、頑張れよ。」

高町先輩はそう軽く返事すると、自分の作業に戻る。

容器の方へと行くと、その近くに河童や淀入道がさらに細かく分けられて陳列されていた。

しかし、淀坊主だけは身体が残っている。

「……？先輩、淀坊主はバラさないんすか？」

僕が尋ねると、彼は肩を落とす。

「なんか硬い何かに阻まれてな。まあ別に問題ないから詰めてしまおうって話になってる。4つある内の1個を胴体1個分使う。」

「分かりました。」

僕は言われるままに、容器詰めに取り掛かる。

おっっっも！

そりゃ切り分けられなかったから当然ではあるが……。

なんとか先輩の手も借りて持ち上げると放り込む。

ぐちゃっと水っぽい音と共に容器が揺れる。

音からしてばっちなあ……。

「ばらしてある奴は付けてあるナンバータグで纏めて入れておけ。俺は清掃作業に戻るから。」

「りよ、了解しました!!」

頷くと、先輩はモップで下水道の外壁の血液や妖の体液を取る作業を続ける。

そして僕は言われるままに、容器に妖の身体を詰めていく。

それにしたってバラした所とは別の断面、退魔師が斬った部分はいつ見ても綺麗な断面である。

もことからこんな状態だったと言われても信じてしまいそうになる



程だ。

こんなのを一個人が出来るなんて、凄いなあ……。

僕よりも若い子も居るらしいし、そう考えると大したものである。

僕はこんなドブさらいみたいな仕事してるのに、彼らは自分たちの仕事の後に俺達が片付けをするなんて考えることも少ないだろうな。

そう考えると、なんともやるせない気持ちになる。

溜息を吐く。

こんな湿っぽいところに居るからそんな方向に思考が傾くのである。

さっさと終わらせよう。

そう決めると、手を黙々と動かし始めた。

◇

「えーと、今運んでるの……何番だっけ？」

「確か、先輩のは3番です。後、残りは淀入道の胴体を入れてある5番ですかね。」

下水道の清掃を終えた僕たちは、報告やサンプルの安置の為に蔵知院と呼ばれる施設に訪れていた。

退魔師としての協会や妖の研究、そして僕たち清掃員の事務所などを併設した大きな規模の施設である。

そして、今僕とチーフは検体収容室に今日採集した妖のサンプルを運び込んでいた。

チーフの癖にそのくらいのこと覚えておけよ。

まあ、言わないけど。

「そうか……あと一つか。」

神妙な面持ちで呟くチーフ。

はて……何か気にかかるようなことでもあったのだろうか？

そう思いながらも、検体収容室に3番の検体を安置して、部屋を出た。

窓の外は既に暗く、夜になっている。

微かにどこぞの馬の骨とも知らぬ虫の鳴く声が聞こえてきた。

後は5番の検体を取りに行くだけである。

そう思った矢先、自分たちの進行方向から一人の人影がこちらの方  
向に歩いてくるのが見えた。

それは可憐という言葉来形容したかのような少女。

長い髪と、大人しそうな容貌。

そして伏し目がちな目は一瞬こちらに向けられると、慎ましやかに  
口が開かれる。

「こんばん．．．わ．．．」

遠慮がちに発されたその言葉。

しかし、僕達は壁の横に避けると頭を下げる。

それは、彼女が何者なのか知っているからだ。

「お疲れ様です。冷泉様。」

「お。お疲れ様です．．．！」

チーフの動きは慣れたもので、僕もぎこちないながらも同調する。

目の前の彼女は冷泉文代。

退魔師の中でも四柱と言われている家の一つ、『冷泉家』の次女であ  
る。

そして今もバリバリ妖を狩っているエース的な存在でもあるのだ。

齢からしても大体中学二年生くらいなのに、凄い女の子である。

中学二年なんて僕の時は大したこと考えてないし、そもそもしてす  
らいなかったような気がするもんなあ。

．．．ただ、それだけにこんな時間まで何をしていたのか．．．しなく  
てはならないことがあるということが何とはなしに可哀想に感じた。

他の中学二年生と違って背負う物が彼女にはあるから、気楽という  
わけにもいかないだろう。

でも、多少なりとも一般同年代とは違うっていう特別感はずっと味  
わってるんじゃないですか？

見下されてるかもしれないなあ．．．知らんけど。

「．．．ん。」

顔を上げる。

すると、一瞬彼女と目が合った気がした。

しかし、すぐに彼女は僕達の行動に返答するとそのまま通り過ぎてしまう。

・・・いや、目が合ったのは気のせいだったかもしれない。

清掃員は悲しいことに男ばかりだからな。

女の子と接するのが久しぶり過ぎて心が過敏になっているのだろう。

「・・・先輩。中学生なのに冷泉様、こんな時間まで何してたんでしようかね？」

彼女が通り過ぎてしばらくして、また検体5番を取りに歩き始める。

そこでなんとはなしに話題としてさっきの少女退魔師について質問した。

「そりやお前・・・さっきまで妖退治しててその報告・・・とか、資料室で妖について調べたりとかじゃないか？なんだ？気になるのか？・・・もしかして、ああいう女の子が気になるのか？中学生が。」

「めっちゃ危ない文字面ですね、それは。やめてくださいよ！・・・なんとなく気になっただけです。」

「俺も言ってみただけだ。」

僕がそう言うも、先輩は前を向いてただ歩き続けるのみ。

・・・まあ、会話を続けるための冗談だったことは分かっていた。

しかしまあ新人なだけあってよく揶揄われるものだ。

正直、そういう扱いに少しようんざりしている節もある。

当人は可愛がり程度にしか考えていないだろうけどな。

それにしたって冷泉文代か・・・。

年齢的に手を出しちやマズイ年齢ではあるが、顔が良いし胸も小さいので出せるのなら出してみたいとも思いはする。

そんな一時の下らない欲求に流されてその後の人生全部棒に振るような選択は取らないが。

そう言っていると、検体5番を一時的に置いていた場所に辿り着く。

あとは、これを検体収容室へと運ぶだけである。  
さつさとやって帰りますかね。

そう思っていると、先輩が口を開く。

「…すまない。残り一つだし、あとはお前がやっていてくれないか？」

「えっ？僕一人…ですか？どうして…？」

いきなりどうしたというのだろうか？

チーフは良くも悪くも厳しい人なので、少なくとも仕事に関しては責任感ある行動を取る人だが。

それなのに、今回そう言い出すということは何か理由があるのだろうか？

…それか、しばらく一緒に働いて来てコイツなら仕事一人でやらせても何も文句言わないだろうなと思われたか。

すると、チーフは顔を伏せながらもゆっくりとワケを離す。

「今日…息子の誕生日でな。日頃から仕事も忙しくて会えていないから、この日だけは家族と一緒に居たいんだ。もう、時間が来そうになってな…これは私用だし、あまり褒められることではない。だからお前が咎めるのであれば従おう。ただ、出来るのであれば…許して欲しい。」

深刻な表情でそう訴えかける先輩。

そのわけを聞いて、僕が言うべき言葉は一つだけだった。

「な、何言ってるんすか！そんなの止めるわけないじゃないですか！日頃からお子さんに会えていないのでしょうか？だったら、誕生日の日くらいは一緒に居てあげてください。一つだけなら、あとはどうとでもなります！帰ってあげてくださいいよ…。」

僕が言うのと、先輩は申し訳ないと言ったように深々と頭を下げた。

そして、こちらに手を差し出して鍵を渡してくる。

「本当に…ありがとう…。この埋め合わせは必ずする。検体収容室の鍵も渡しておく。閉めたら受付に言って渡してくれ。それで仕事は終わりだ。」

「分かりました。」

そう言うと、先輩はこちらを一瞥してまた一礼すると部屋を出て行った。

これが父親の姿・・・ということだろうか。

僕は捨て子だから、家族がどういう物か知らない。

だからこそ、家族つていうのは一緒に入れるのであれば一緒に居るべきだろう。

どんな時でもそうするのが理想だ。

なんか・・・しみじみとした気分だ。

子供の為に一生懸命になれる親の姿に、一抹の羨ましさを感じたからだろうか？

ちゃんとした施設ではなくて家族の元で育っていたら今とは違った人生を送っていたのだろうか？

まあ、そんな仮定の話にはなんの価値もないのだが。

「それじゃ・・・運ぶか。」

独り言をつぶやくと、近くに台車に5番の検体を入れてある容器を置く。

やっぱり重いなあ、コレ。

よっこらせと容器を置くと、台車を押して部屋を出た。

経費削減のつもりか知らないが、全体的に資料室や検体収容室の通りは電気が少し薄暗いので一人で歩くと少し不気味に感じる。

人も少ない廊下に台車を押す音だけがただただ響く。

何も無い、無の時間。

何を考えるでもなく、ただ検体収容室へと足を向かわせる。

「着いたな・・・さつさと置いちゃおう。」

歩いていると、元来た検体収容室へと辿り着く。

一度入退室する際は扉を閉めることが義務付けられており、再度重い鉄の扉を開けないといけないのだ。

正直面倒臭いが、妖の体の一部や遺骸を安置している以上はそういうセキリテイはちゃんとしないとな。

それにしたってこの仕事を初めて重い物を持つ機会がよくあるからだろうか、ここに来る前よりも筋肉が付いてきた気がする。

「っ……しよっ……とお……！」

ゆつくりと両扉を開ける。

薄暗い廊下から扉を開けると、これまた薄暗い部屋。

そこに台車を押しして中に入りつつ、扉をまた閉めていく。

戸締りはよしっ！

台車を押ししてさつき3番を置いた場所に置くか。

そう思っただけだと、少しの段差があったのか台車が揺れた。

その瞬間、段差が原因にはおかしいほどに派手に容器が倒れてしまう。

そしてこれまた倒れただけなのにも関わらず、容器の蓋が取れて内容物の体液が漏れ出して淀坊主の胴体が容器から顔を出した。

床は内容物の体液で汚れてしまっていた。

「うわぁ……最悪……。なんでこんな蓋取れるんだよ……。老朽化か？いや、でも残骸詰めてる時はそんなことなかったはずだけだなあ……。」

これ掃除しないとイケないじゃん……。二度手間なんだよなあ。

こういうミスはなくしたと思っただけの所で犯してしまう。

自分が嫌になるよ……。まったく……。

溜息を吐きながらも、まずは容器から少し出ってしまった淀坊主の胴体を容器に戻そう。

そう思っただけで容器を少し浮かせて、胴体に手を触れたその瞬間。

「ひっ……！！」

メリメリと肉を裂くような音と共に胴体から細い紐のような物が腕に巻き付く。

紐の先端はピロピロと蠢いており、生理的嫌悪感を覚える見た目。

そして、端が鋭利なのか巻き付いた部分から血が出てくる。

痛い……。

その場から逃げ出そうとして飛び退く。

しかし、その瞬間さらに裂け目が広がって胴体から何か大きなサイズの物が飛び出してくる。

それはカブトガニのような扁平型の甲殻類のような妖。

こちらに飛び掛かってくるので手で押さえる。

「なんつだよこれっ!!ひっ… 気持ち悪いなお前え!!ぺっ!ぺっ!  
どっ… けえ…!!」

「霄オ菴難シッゴオ菴難シ…眠縛励< 霄オ菴難シ?シ?シ」  
キーキーと甲高い声を上げながら、こちらの顔面に引っ付こうとする妖。

裏面からは粘液に塗れてテラテラとしている管のような器官が出て、しきりに僕の口に入ろうとする。

何の意図かは分からないが、奴の思い通りにしたらどうなるか…  
背筋が寒くなる。

振り払おうとしても、尻尾が腕に巻き付いて振り払いきれない。

寧ろ、腕を締め付けられることで切れる痛みとぐいぐいと引き寄せられることで切羽詰まってしまう。

どうしたら… どうすればいい…? ?

俺はただの現場の後処理のこれまた下っ端。

こんな風に生きている妖に遭遇して、襲われても対処法なんかない。  
い。

しきりに管を伸ばそうとする妖に覚える恐怖。

その恐怖でテンパっているのか意識が段々と混濁して…。

「刺凍」

背後から、聞こえてきた少女の声。

その声は鈴を転がしたかのようにか細く… それでいてはつきりと空気を揺らす声。

そして、背後から冷たく清涼な風が暗く淀んだ検体収容室に吹き込む。  
む。

風が頬に当たって、混濁していた意識がはつきりとする。

目の前の生き物に、苦無がぶっ刺さる。

刺された箇所から紫色の血が飛沫となって掛かろうとする。

しかし、僕に掛かる前に凍結して氷の粒となって皮膚に当たって地面に落ちる。

「縛ゆ≡縛ゆ≠縛√≠縛ゆ≠縛ゑシ?シ?シ√。 縲ッゴオ菴難シのソ

コ纏ヨ霄オ菴薙'??シ?シ√h纏薙○纒医%纏帙h纏薙○鬆台ク医→  
霄オ菴難シ?シ?シ?シ」

目の前の妖が断末魔のように声を発する。

しかし、段々と白く冷たくなっていく。

これは・・・凍結している？

そして、パキパキと氷を飲み物に放り込んだかのような音が目の前の妖から響いたかと思えば、おのずから砕けた。

胸に苦無が落ちる。

しかし肌に触れた瞬間溶けたからか、痛みはない。

ただ、仰向けになった俺に見えるのは俺を見下ろす冷泉文代が感情の窺えないような目つきで俺を見下ろしている姿。

そして、スカートが短いからか見えてしまった黒の下着。

・・・年齢にしては少し大胆じゃないか？

最近の中学生はこんなものなのだろうか？

そして、彼女はゆっくりと口を開く。

「・・・それ、大丈夫？」

彼女が指さす先。

それは、さっきの奴の尻尾が巻き付いていた腕の箇所。

そこだけ局所的に痛ましくズル剥けになって血が滲んでいた。

うわあ・・・道理ですつげえ痛いはずだ。

そんでもって大丈夫かと問われたら・・・。

「わかんねえ・・・です。」

そう答えるしかなかった。

突然の出来事で敬語が出てこなかったのも、咄嗟に敬語を付け足したせいどころかちぐはぐな言葉になってしまった。

「・・・たとえば死骸であっても・・・妖には触れない方が良い・・・。」

「は、はあ・・・申し訳ありません。」

腕の手当てを受けた俺は、施設内を冷泉文代と一緒に歩いている。

どうやらアレは他の妖に寄生している妖らしく、身体を求めて人間にも寄生しようとするらしい。



説教を喰らってはいるが、正直触ろうと思つて触つたわけじゃなくて倒してしまったから触らざるを得なくなつたつていうか……まあ、なんにせよ僕の不注意のせいだな。

「……。」

「……。」

会話が續かねえ……。  
見た目からして分かるが彼女は活発な方ではないし、そもそも中学生と話す話題なんか持ち合わせていない。

……いや、寧ろこれは恵まれているのか。

彼女は名家の冷泉家の人間。

つまりは、滅茶苦茶目上の人だ。

下手に話して、失礼になると思うと背筋が寒くなる。

話しかけられない方が話さなくて済むので楽だ。

……しかし、一つずつと気になることがある。

そこだけ聞いたら会話はしなくても良いだろう。

「あの……助けていただいてありがとうございます……、その、なんでもんな所まで駆け付けられたんですか？その……あの時、すれ違つていましたし……。」

僕が言うと、しばしの間が挟まれて彼女が口を開いた。

「……私は耳が良い……。そして、妖の気配にも敏感。だから駆け付けられた……。生まれ持った才能に感謝。」

「はあ……。そうですか。」

なんか釈然としない解答だったが、彼女のような退魔師を僕のような凡人の尺度に当てはめようとする考え方が既に無理があるのかもしれないな。

……それにしたつて、立場が違うとはいえこんな年下の少女にへこへこしないといけないなんて本当に情けない僕は。

僕の人生、こんなことばかりだ。

捨てられて引き取られた時も、施設で育てられた時もこの職場に就いた時も誰かの慈悲？つていうかそんなのに許されて生きているよな気がする。

… 別段、何かしたいという意欲もないのだから流されるままでも良いのだろうか。

それでも… それでこんな風に生きていて、将来のビジョンもへつたくれもない。

どうなつちやうのかね？ 10年後の自分。

「貴方は… どうしてここに居る？」

「… え？」

え？いきなりどうした??

彼女の問いかけに戸惑っていると、彼女は二の句を継ぐ。

「その仕事は… あまり見ていると、気持ちはいい物は見られない… どのような形でも妖に関わると言うのは、そういうこと。私は家業… あなたは？」

つまりは家の事情で妖に関わっているが、なんの後ろ盾もないような貴方はこういう職種になんで就いたんですかってことか。

良いところのお嬢様らしい発言だ。

自分で何もかも選ぶことが出来る人間らしい言葉。

世の中には自分で選ぶことが出来ない… もしくは選ぶ気の起きない人間が居るといふことは考慮の範囲外にあると分かる。

僕の理由なんてただ孤児院の職員の一人にこのこと関わりのある人間が居て、給料は良いからと勧められたからに過ぎない。

まあ、天涯孤独な人間なんてこういうガチの汚れ仕事をさせるには丁度いいだろうしな。

もし死んでも後腐れなくて、替えも利く。

でも、そのまま彼女に伝えるのもよろしくないだろう。

プライド的にも、教育的にも。

だから、俺は笑顔を作って言葉を紡いだ。

「なんていうか、こんな自分でも役に立つ場所… っていうのが、こういう職種しかなかったから… ですかね？ ははっ、なんか照れくさいな…。」

我ながら白々しい嘘である。

照れくさいってなんだよ、何も思っていない癖に。

「…そう。」

しかも演技までしたのに、彼女の返答は淡白な物である。そちらから聞いたと言うのになんだ。梯子を外された気分だ。

「…それじゃあ、ここで。今日の凶は東。貴方の自宅はここから最短で東から30分だけど、今日は西から帰宅することをお勧めする。…二度目になるけど今度から、遺骸は慎重に扱った方が良い。」  
「へ〜そうなんですね。何から何までありがとうございます。心掛けます。」

二度目のお叱りを受けて、愛想笑いを浮かべながらも彼女に礼を言う。

方違いとかだろうか？

今の時代にそんなこと真面目に言う子が居るなんてなあ。

勿論、守る気など毛頭ないが。

だって、今まで気にしたこともないのにここで言われたからと言って言う通りに遠回りするのも間抜けだろう。

こっぴどく何回も家に同じ道で帰ってるなら、彼女の言うように運勢が凶だった日は他にもあるだろう。

それでもこうして何も起きずに生きているのだから、気にしすぎるのはよろしくないと思う。

まあ、なんかあった時はなんかあった時でしょ。

正直、あんなことがあった後で何も考えたくない。

疲れた。

「それでは、さようなら。」

「…さよなら。」

彼女に別れを告げて、門から出る。

関わりなんてない人だったが、悪い人ではなさそうだ。

…いや、なんかさっきの会話…主に家の吉兆の所…なんかおかしくなかったか？

…うーん、ダメだ。

違和感を感じるが、頭がうまく回らない。

まあ、いつか。

今日の帰りは何買おうか。

この時間だからコンビニ飯だろうな……。

◇

誰もが寝静まった深夜3時。

男はベッドに横になって眠っている。

周囲の部屋は適度に散らかっており、生活感溢れている。

締め切られたカーテンの隙間から月の光が差し込む。

そんな中、月光が陰る。

壁に映し出されるのは人影。

それは白い着物を着た一人の少女。

締め切られ、彼だけしかないはずの部屋の中に居るはずもない少女。

烏羽玉の髪に、固く結ばれた口。

貞淑な雰囲気をつつした大和撫子と形容されるような少女が立っている。

彼女はただ眠りこけている男を見ている。

そしてゆつくりと口を開いた。

「私、西から帰ってって言った……それなのに、貴方は……守らなかつた。」

彼女はむくれながら、しやがみ込むと男の顔を覗き込む。

男は間抜けにも口をガン開きにして、口の端からよだれ垂らしながらガーガーといびきを掻いている。

しかし、そんな姿に眉根一つ動かすことはない。

「……反省、しなさい。大変……だった。めっ！」

「んんう……んがっ……」

身じろぎをしながらも、変な声を上げる。

そんな彼を能面のような表面をしながら指で頬をつつく。

「眠ってるからって許さない……。ごめんなさいして、ごめんなさい……。こらっ。かわいいこぶつても……。ダメ。この……。このっ……。」

そう言いながらもつついてた指はいつの間にか彼の輪郭を撫で始める。

輪郭を撫でたと思えば、今度は髪へと手を移っていく。

そして不意に彼女は男の顔が付きそうな距離まで顔を近づける。

「んんっ……」

長い髪が彼の顔に掛かる。

鬱陶しそうに首を横に動かす男。

そして、彼女はゆっくりと口を開いた。

「冷泉家紋命ず霊験開門霊脈触発霊力廻……。かしこみかしこみ……。冷泉家紋命ず霊験開門霊脈触発霊力廻……」

まるで男の耳に声を流し込むように至近距離で囁く。

その瞬間、周囲の空気が変わる。

冷たく鋭く肌を刺すように揺らぐ。

「ん……。ううう……。うぐうう……」

うなされているのか苦悶の声を上げながら、彼女から身体を背ける。

すると、彼女はゆっくりと顔を離す。

「……。ごめんね……。あなたが、私達を羨んでいるの、知ってる……。から。私と……。同じにしてあげ、たかったんだけど……。まだダメみたい。」

申し訳なさげな声音で詫びる。

そしてゆっくりと立ち上がると、布団を捲った。

「それじゃ……。それは、それ……。として。せっかく、来たし……。お邪魔、します……。」

そうして言い訳するように呟くと、彼女はゆっくりと足から布団の中へと潜り込んでいった。

「んんっ……。ふああ……。汗やば。うなされてたのか……。んんっ

！」

起き上がると、身体中が汗でべとべとだ。

服が肌を纏わりつく感覚に不快感を覚えながらも、伸びをする。いくらなんでもこのままじゃ気持ちが悪い。

シャワーを浴びよう。

そう思って布団を捲って、ベッドから立ち上がろうとした瞬間にとあるものが目に入った。

「なんだこれ……紙？」

それは、俺の隣に寄り添うように並んだ小さな紙切れ。

どことなく人型に見える。

はて……こんなもの作った覚えがないが……。

もしかしてお酒で酔っぱらった時に手慰みに作ったのだろうか？

「まっいいか。さっむ……シャワーシャワー……。」

その紙を手にとると握りつぶしてゴミ箱へと投げ込む。

朝の冷気は汗まみれの身体を効率よく冷ましていく。

速く風呂に入って汗を流そう。

そう思ってベッドから立ち上がった。

## 休日出勤

「えーと、つまりこれは西条家からの個人的な依頼ってことですか？」  
「まあ、そういうことだな。」

せつかくの休日。

何をすることもなく、家で気に入っている動画投稿者の動画でも見ようかと思っていた矢先に職場に呼び出された。

なんで休日に職場になんて行かないといけないのか分からないが、こちらは新人の身。

それにこの仕事はお金に色が付くということを知っては参加せずにはいられない。

何もすることがないのであれば、その時間をお金の為に使うことは有意義だと判断したからである。

しかし来てみれば、言われたのはとある家の令嬢による個人的な清掃依頼。

どうやら家の外壁を清掃して欲しいとのこと。

正直言って、現場の清掃なんかよりは楽であることは確定であるが自分一人であるということが一番嫌だった。

だって一人つてことは負担は全て一人に集中するし、そもそも西条は四柱の次の序列くらいの家柄なのでそんなのを一人で相手するなんて御免被りたい。

「なんで僕一人なんですか？先輩たちも来てくださいよ。せつかく皆さん出勤してるんですからあー！」

事務所内で思い思いに過ごしている先輩たちに目を向けて、チーフにそう主張する。

しかし、チーフは頑なな様子で首を横に振った。

「それは出来ない。お前が西条の清掃を行っている間に我々は巻添市のホテルで発生し、破壊された『淫妖界』の後始末を行わなければならないからな。」

「淫妖界……。」

その言葉には心当たりがあった。

確か、危険度の高い仕事として挙げられていたっけ。

思い出していると、急に横から肩を組まれる。

見ると、それは高町先輩だった。

相変わらずフレンドリー……悪く言えばいちいち馴れ馴れしい人だった。

「淫妖界つーのは上級の妖が形成する建物を媒介とした大規模な結界でな。大概中はなんだろうな……形容するなら臓器の中みたいな？べちやべちやしてて触手が滅茶苦茶あつて……そこで捉えた人間で繁殖活動を行っていたり、食料として保管していたりするんだ。壁が肉壁でびっしり触手生えてたりするし、マジで気持ち悪いんだよ。人間が壁に埋め込まれていて触手になんかされてたりするし、見ていて心地よい物ではないな。」

なるほど、淫妖界とはそう言うところなのだな。

なんとというか、説明だけ聞くとなんとなくネットとかで話題になっているエロトラップダンジョンを想起させられた。

そんな甘つちよろい物ではないんだろうなということ察しはつくのだが。

「既に退魔師によって淫妖界は制圧されているとはいえ、未だどのような結界なのか詳しく分かっていない。以前にも制圧したと見なされていた淫妖界から触手や妖が発生した例や制圧したわけではなく非活性化状態になっていただけで再活性化した例がある。このことから新人には規則として特例がない限りは淫妖界への同行は認められていないんだ。だからこそ、丁度良く暇な人員をよこせと西条様から言われたのでお前を向かわせることとなったわけだ。」

「なるほど、そういうことですか。」

どうやら僕以外の全員がやらないといけない仕事があるらしい。

そんなでもって西条家からの要求だからこそ、断るわけにもいかず丁度良く新人だから淫妖界での仕事に参加出来ない僕が居たというわけだ。

ここに居なければバックレられたかもしれないが、なんにせよ金に釣られてきたのが運の尽きという奴か。



それに、危険な目に遭うかもしれない淫妖界の仕事よりかは幾分マシであろう。

そう考えることにしよう。

「西条つつーとこええぞ。そこの娘さん、結構ガラが悪いらしいからなあ。まあ、俺達のやる仕事の方がやべえの事実だけど、清掃が甘けりやもしかしたらぶん殴られるかもしれないねえなあ。」

前言撤回。

めっちゃ行きたくない。

正直、そんな人種苦手以外の何者でもない。

「おい、あんまり脅かすな。安心しろ、そこまで個人的な話をする事はない。最低限の礼儀がなっていれば向こう側も何も言わないだろう。それに、何かあれば新人であるお前ではなく俺に話が行く。そこまで怯える必要はない。いつも通り、やるべきことを黙々とこなせばいい。」

「はあ……そうですか。」

ニヤつく高町先輩を内藤チーフは睨みつける。

そしてこちらを安心させようとそう言葉を紡ぐ。

まあ清掃人に対してそこまで積極的に接触する雇い主も少ないか。それが確実な上の立場であれば猶更。

それに、何かやって責任を取らされるのは内藤チーフ。

だったら気負わなくてもいい……のか？

「まあ、金多くもらえるチャンスなんだ。頑張れよ！」

高町先輩は僕の背中を叩く。

ちよつといてえな…… 本人的には本気ではないんだろうけど。

「う、うす。」

笑顔を見せる高町先輩に頭を垂れると、今度は内藤チーフが腕を組む。

「機材は向こうが用意してくれているから。お前は身一つで行くだけで良い。場所は今送った。頼んだぞ。」

「分かりました。」

機材を用意しなくてもいいなら、結構楽だな。

それじゃあ向かうか。  
ロッカーの方へ向かって作業着に着替える。  
そして、部屋の外を出ると受け取った位置情報を携帯で見ると  
た。

◇

位置情報に示されていた場所。  
赴いてみれば閑静な住宅街だ。  
周りを見回せば一戸建ての家ばっか。

「アパート暮らしの俺とは縁遠いものだな。」  
周囲を眺めて独り言ちる。  
家か……。

果たして僕に一軒家を買えるかどうか。  
家賃を払う必要がない家には心惹かれる物があるが。  
だってそれってつまり僕の財産ってことだろ。  
それに借り物ではない自分だけの物と言える。  
なんかポスター張ったりとか内装とかで壁に穴開けると退去時に  
金かかるとか色々考えずに済むし。

……まあ今のどうしようもない段階で考えても虚しくなるだけだ  
が。  
そう思いながらも画面を見ると、どうやら目的地は目の前の角を曲  
がったところらしい。

取り敢えず立場が上の人達なので、失礼のないようにしないとな。  
そう思いながら、目の前の角を曲がる。  
そして、目の前に広がる光景に目を見張った。

「うわぁ……。」  
目の前にある立派な垣根や門がついた日本家屋の豪邸。  
しかし、そこにはスプレーや絵の具などで所狭しと落書きされてい  
て酷い有様である。  
ここだけスラム街みたいな光景してやがる。

なんか廃墟サイトとかでヤバイ背景があってもぬけの殻になって  
いる家じゃんコレ。

「地図を見る限り……ここなんだよなあ……。」

スマホを見る限り、ここであることに間違いない。

恐る恐る近づいて行って門の横に就いているインターホンを押す。

……これよく見たらカメラの所塗りつぶされてるじゃん。  
えぐいな。

横に見える門には大きく『不知火死ね』と大きく書かれており、そ  
の上から『マンコの割れ目もう一個作つたらかコラ』『マンコの臭さ日  
本一く！』『お前弱いねほんと』『明日お前の家燃やすから？』と書き  
殴られていた。

品性の欠片もないじゃん……本当に西条の家かよこれ……。

外観に圧倒されていると、暫くしてドアの開く音がする。

多分、カメラを塗りつぶされていたから直接確認に来たのかな。

そして門が開かれた。

「あん……誰だテメー。」

そして門の隙間から赤みがかったショートヘアの女の子が顔を出  
す。

顔立ちや身体付きからして高校生くらいだろうか。

西条については僕詳しく知らないんだよなあ。

目つきは鋭く、どこか不機嫌そうにこちらを睨みつけている。

美人ではあるが、おっかない。

言うならばほら、ギャルとかヤンキーとかそこらへんのオラオラ感  
？が出ていた。

運動でもしていたのだろうか？

スポーツタンクトップを着て、額に滲んだ汗と乱れて張り付いた前  
髪を見てそう思った。

「あ、あの……僕、西条家から要請されて掃除班から派遣されてき  
た葦矢と申しますけれど……こちら西条様の御宅で間違いないです  
か？」

出来れば間違いであって欲しい。

落書きが広範囲過ぎて掃除するのが確定で怠いだろうし、何よりこの住宅街の中で異質極まりない。

ここだけ異空間みたいな有様だから、さっさと離れたかった。

すると、不機嫌な様子でこちらを睨みつけていた彼女の表情が一変、人好きのするような屈託のない笑顔を浮かべる。

「ああ!? なんだよ掃除の奴かよ、さっさと見えよ。てつきり遂にインターホン鳴らす度胸のある奴が出てきたのかと思っちゃまったじゃねえかよ! 待ってる、道具もってくつから。」

そう言うと、また門の内へと引っ込んでしまう。

やっぱりここが西条の屋敷らしい。

やはりと言うべきか、家の中までは落書きは及んでおらず見える範囲で上品な日本庭園が見える。

しかし何をすればこんな風に落書きされるのか、気になる物である。

ただの野次馬根性であるが聞いても良いのだろうか……いや、掃除する以上は聞く権利がないわけでもないように思える。

しかし、あの子が多分西条の娘さんだろ?

高町先輩が言うにはガラが悪いそうじゃないか。

聞くの怖いなあ……。

「おら、よく分かんねえから家じゅうの掃除道具かたっぱしから集めてきた。これ使って門と垣根の落書き落としてくれよ。水とかは門の内側のあそこに蛇口あつから。」

大きなバケツを両手で持ってくる、俺の足元に置く。

そこにはスポンジやら雑巾やらの掃除道具とよく分からない洗剤が5本入っている。

豊富であるが、雑多。

多分、本当に分からないからこそ家にある落書き落として使えるような掃除道具を持ってきたのだろう。

そんでもってまた門の内側に戻ると、今度は高压洗浄機もバケツの隣に置く。

「わかりました。」

「おう、頼むぜ。オレはトレーニングしてるからよ。なんかあったら呼んでくれ。でけえ声張り上げてな。」

そう言つて、門の中へと入って行こうとする。

「あ、あのーちよつと待ってくださいー！それで掃除する上で聞きたいんですけど… どうしてこんなことに？」

しかし、人の好奇心というものは罪な物で気になってつい聞いてしまった。

一応掃除する上というつて建前はあるし、許されるか…？

すると、彼女は一瞬嫌そうな表情を見せるも深くため息を吐く。

そしてゆっくりと口を開いた。

「あー、なんだ。オレ、自分で言うのもおかしな話だけど所謂由緒正しい血統のお嬢様っつー奴じゃん？」

「は、はあ… そう… つすね。」

この有様と、どこか不良然とした彼女の振舞いから忘れてしまいうになるが一応は四柱に次ぐ名家連中の中の一人だ。

そりやくつそお嬢様だろう。

しかし、それがなんの関係があるのだろう。

もしかしたら豊かであることで周辺住民から嫌がらせされてるとか？

だとしたら可哀想だな… そんなもつてこころ辺の地域の程度が知れるな…。

「だからよお、オレよりも血統としては下の癖に血がなんだの言つて中途半端にやつてるような連中とか親が退魔師じゃなくても頑張つてるような奴見下してるような奴見るとつい耐えられずにメチまうんだよなあ。テメエらごときが何やつてんだってな。そんなこと繰り返してたら恨み買ってたらしくて遂に今朝起きたらこうなつてた。」

「ええ…。」

彼女がモロに原因だった。

まあ、行動を起こす理由としては義憤に聞こえる。

だが聞き方によれば自分と同じくらい… つまり彼女以上である

四柱の人間であれば彼女が言う中途半端な真似したり、見下したりすることを容認しているように聞こえるのは僕が卑屈になっているだけか。

「というか……。」

「退魔師の人たちにもこういう嫌がらせする人……居るんすね。」

「あ?… ああ、そーゆこと。別にオレ達だってアンタと同じ人間だしな。なまじオレには絶対に勝てないからこういう方向でしか仕返しできないんだろ。しようもないよな、まったく……。」

「そう言いながら肩を落とすと、門の中へと入っていく。」

「しようもないと言いながら、結構効いているようだった。」

「…… まあ、妖に対抗できる力を持つといっても一人間。」

「そりや嫉妬するだろうし、嫌がらせもするだろう。」

「組織においての立場がその連中よりも下だから自分とは切り離して違う人間だと考えていたのかもしれないな。」

「…… さて、掃除するか。」

「僕も門の中へと入る。」

「すると、すぐそこに水場がある。」

「庭の手入れ用だろうか。」

「使わせてもらおう。」

「バケツに水を入れる。」

「そして、重いバケツを両手で持ちながら外に出るとそのまま足元に置く。」

「さて、仕事に取り掛かるとしますかね。」

『不知火ちゃんは37人目でボコにされました?』

「…… ボコにされるってなんだよ……。」

「落書きを色んな洗剤掛けながら拭いて消していくこと2時間。」

「垣根の上の方にまで書いているのを見て、ある種の執念のような物を感じていた。」

「それにしたってさつき消した『享年17歳』の落書きとかならまだしも、今消しているコレのような意味の分からない落書きとかもあつ

て、これ書いている奴どんな顔して書いているのか気になる物である。

まあ『ぜってーワキガ』とか『駅前でウリやってます。中年オヤジのくっせえチンポ大好きです?』とか『豚条☆マゾぬい 趣味:ザーメンゲツプとリンチされること?』みたいなひつでえ落書きがあるのも事実だが。

便所の落書きの寄せ集めみたいな有様だなあ……。

こんなの書いている奴とか品性疑うわ……。

そう呆れていると、曲がり角から人影が入ってくるのが見える。

そこに立っているのはセーラー服の少女3人。

3人とも目つきが悪く、髪の毛は金髪。

それも外国人やハーフのような生まれつき特有の綺麗で自然な発色ではなく、所謂髪を染めた後に色が抜けきったかのような色をしていた。

そんでもってマスクには『仁義』とか『無双』とか書かれてあり、手にはスプレーらしきものを持っていた。

……絶対アイツらが犯人じゃん。

え……西条不知火の口ぶりから察するに多分あの人達も退魔師ってことだよな……。

それにしたってファンキーすぎないか?

あれじゃ一昔前のスケバン……いやそれより酷い。

彼らが角を曲がり、2、3歩踏み出した時点で眼が合った。

うわあ……目が合っちゃった……。

やろうとしていることはなんとなく分かった。

多分、今日も落書きをしていくつもりだろう。

しかし、それをされると困る。

そりゃ僕が今綺麗にしている途中であるし、そもそも人の家に落書きされそうなのに止めないのかお前と詰め寄られてしまえばぐうの音も出ない。

でもなあ……アイツら退魔師ってことは俺よりも立場が上で、しかも強いと来ている

なんか呪いの何かを掛けられたりしたらと思うと声を出すのを躊躇われる。

……まあ、でも結局のところ僕がどうすべきかなんて決まっているわけだ。

見る限り、彼らは学生である。

大人として、清掃人として、人として僕がやるべきこと。

そんなのは明白だ。

「あの人、君たち……もしかしてこの垣根や門に落書きしに来たのかな？」

「……あ？話掛けてくんじゃねーよおっさん。」

「そーそー引っ込んでなよ。」

「アタシら、舐めてつと痛い目見つよ？制服見るに、掃除している奴だよねえ？アタシらの後始末で御給金もらってる奴があたしたちの機嫌損ねて良いわけ？アタシら退魔師ぞ？」

お……おっさん……

いや、まあ20台であつても社会人なんて学生からみたら大人……つまりはおっさんか。

それに老けて見られているのかもしれない。

しかし見事なまでに威圧的だ。

そしてヘラヘラとこちらを嘲笑しながらもそう言ってくる。

作業着から僕が掃除班の人間であるということが分かったらしい。分かったうえでこれな時点で僕らがどれだけ軽んじられているのかって言うのが分かるな。

舐められていることがはっきり分かる。

……ああ、嫌だな話したくないなあ。

それでも言っておくべきことは言っておかないと。

少なくとも、ここで俺が何をされようと制止したという事実が大事なんだ。

仕事を俺は真面目にやっついていて制止もしたが、致し方なく汚された。

これなら西条に悪印象を抱かれずに済むだろう。



あくまで笑顔を向けて、好意的な様子を見せる。

「その、別に機嫌を損ねるつもりはないですよ。ただ、この落書きを消すのが僕の西条様に言づけられた仕事でして……なのでその汚されると困るんですよ……。だから落書きは後日にして頂けないでしょうか?」

あくまで下手に出て頼み込む。

すると3人は顔を見合わせて、そして大きな声を上げて笑う。

「お前の都合なんて知らねえよ!」

「つーか、アンタごときが盾突くとか何様なわけえ?」

「みーちゃん、コイツメようよく?」

こちらを嘲笑しつつも、物騒な事を言い出す彼ら。

これはまずい……。かな。

なんで正しいこと言ったのに、こんな風に僕が怯えなければいけないのか。

こういう理不尽なことは別に今回に限ったわけではなく生きている限りはいくらでも直面してきた。

それでも、だからといって慣れて何も感じなくなるほど渴いちゃいなかった。

うんざりだよ、こんなの。

こちらを見てニヤニヤと笑みを浮かべながら一步前に進む彼女達。

霊術を使って僕を痛めつけるつもりだろうか。

困るな……。労災とか出るのかなこれ。

出ないんだったら正式な出勤日である明日の仕事には出れる程度で留めて欲しいな……。

諦観を胸の内に抱く。

しかし、その瞬間俺と彼女たちの間を少女の声が引き裂いた。

「その前に、人の家の前で何イキリ散らかしてんだお前。テメエこそ何様だよ。」

横を見れば、門から西条……多分落書きから察するに不知火?が一步前に踏み出す。

3人は彼女を見て露骨に後ずさる。

「は…はあ？なんでアンタいやがるんだよ…今頃学校だろ!!」

「そ、そーだそーだ！偉そうに説教してる癖にサボりとはどういう了見なんだコラ!!」

「チクツちやうからー！テメエチクツから!!」

なんとというか、さつきまでとはまるで違う。

すっごい小物臭い。

心なしか彼女たちの表情に怯えの色が見える。

そんな彼女たちの言葉を聞いて不知火は鼻で笑う。

「ハッ、ただ単に家の行事がこの後あるから休みとっただけだ。ご心配なさらなくても、学校の方には話は通ってますよ？っつーこと。そういうテメエらはオレの家に落書きする為に態々サボタージユしてきたっつーことだろ。オレの留守を狙ってコソコソしゃばい真似してくれちやつてまあご苦労なこった。」

家の行事があつたのか。

まあ、名家なら色々あるのだろう。

「は…はあ?!変な言いがかり辞めろや！そんなんじゃねえし!!」

「惚けても無駄だ。手にスプレー持つてるし、そもそも声デカくて話し聞こえてたわタコスケが。」

「しまった…!!」

3人の内、真ん中の子が頭を抱えた。

僕も今頃惚けても無駄だと思う。

ははあ…今の3人と彼女の会話から分かるがあの子たち、バカだろ。

いくら何でも油断しすぎだ。

もしくは事前にリサーチして不知火が家に居ないと高をくくっていたのだろうか？

彼女達は最早へっぴり腰。

そんな彼女達を見て、不知火は嗤う。

「それでどーすんだ？元々、オレには会うつもりなかったんだらう？帰ってみるか??オレに背を向けて、尻尾を巻いてよお?」

揶揄するようにそう呟く不知火。

すると3人の内の右側の子が真ん中の子に話しかける。

「ど… どうするみーちゃん…？」

「… じゃん。」

「みーちゃん？」

真ん中の子が俯きながらも、言葉を微かに漏らす。

そんな彼女の様子に首を傾げる右の子。

そして、真ん中の子が顔を上げた。

「やってやる… やってやろうじゃんかよおおお！ああ!? こっちに  
だつて面子つてもんがあるんだ… 西条だが斎条だが知らねえけど  
やってやらあ！お前が偉いんじゃないかって家が偉いんだよ!!時は令和、  
古臭え家制度なんか知ったこっちゃねえ!!下剋上じゃゴラああああ  
!!!」

「み、みーちゃん!」

横の少女の叫びに驚愕する右の子。

すると左の子も不敵な笑みを浮かべて不知火を見据える。

「そうね… 私達三人の複合結界があれば如何に西条の家の人間で  
あつても倒せないことはない。3人寄らばもんじやの知恵つて言う  
じゃない… 怯えてちゃ何も始まらない。」

「あいちゃん… そ、そーだよね。3人集まれば大丈夫だよね!!」

困惑していた右の子も左の子の言葉を聞いて、力強く頷く。

それにしたつてあの子たち他人と話す時と身内で話す時で言葉遣  
い変わるタイプなんだな。

それともんじやじゃなくて文殊だ。

… 正直、不良っていうかマジでただの馬鹿じゃないかこの子た  
ち。

そんな彼女達を見て、溜息を吐きながらも不知火は笑顔を浮かべ  
る。

そして門から一步踏み出して出てくる。

「はあ… 血統とか家が偉い云々についてはテメエらに言われたくな  
いわけだが、でもやる気つてことだな。面子を気にする程度の度胸は  
あるつてことか。少し見直したぜテメーら… おい、アンタ。」

「あ… あ、はい！なんですか？」

すると突然彼女に視線を向けられる。

彼女たちのやり取りに気を取られて反応するのが遅れてしまった。しかし、そんな僕の反応など気にしていない様子で言葉が続ける。

「門くぐったら門を閉じて敷地内で待ってろ。こいつら片付いたら掃除を再開してくれ。」

「あつ、はい。分かりました。では失礼します…。」

どうやら戦闘を行うらしい。

霊術を使っている瞬間なんてこの前の冷泉文代の凍った苦無くらいしか見たことがない。

だから興味がないわけではないが、この世には好奇心は猫をも殺すって言葉がある。

巻き込まれるのは勘弁なので、ここは言う通りにさせてもらおう。すると、そんな僕の行動に目ざとく反応して真ん中の子が指を突き付ける。

「片付けられるのはどつちかなあ!？」

「そーそー！余裕ぶっちゃって、そう言うところがムカつくんだよねえ!!」

「こちとらその男を巻き込んでやっても良いんだぞコラ!!!」

やめなよ。

僕、退魔師じゃないんだよ？

そんな一般人を故意に巻き込もうとするな。

怖すぎでしょマジで…。」

すると、不知火もそれは良しとしないのか彼女達を睨みつける。

「… あまり凶に乗るなよ。オレはただ害虫みたいなお前らがほんの少し人間らしい度胸つーもんを見せてきたから待ってやってるだけで今までの会話の間にオレがその気になればテメーらは既に272回は燃えてるよ。よーするに今からの勝負はお前らの面子を掛けた戦いだろ？あんま白けさせんな。」

「… つー… そのおっさん、さっさと入れ!!」

「ええ… みーちゃん… いいの？」

「いいのっていかそれ以外どうしようもない気がするわね。」  
不知火に睨みつけられると真ん中の子はびくりと身震いした後、気を取り直すように僕に門の中へと行くように促す。

他の二人はなにやら二人でこそこそ話しているみたいだし。

まあ、ここから離脱出来るのは素直にありがたい。

一応彼らも目上である為、会釈しながら門をくぐると閉じる。

そして家の玄関の方まで避難した。

その直後、門の向こうから3人の少女の声が聞こえた。

「アタシから始まるう〜！イェ〜！！棘茨格子！」

まるで山手線ゲームを始めるかのような掛け声と共に手拍子が聞こえる。

多分、声的に真ん中の子だろう。

「…痺痺痺撥々!!」

そして左の子が手拍子の後に霊術の名前…かな？それを口走るのが聞こえる。

「わっ…に、仁郡式御前試合!!…仕上げだよみーちゃん！」

そして慌てた様子の右の子が真ん中の子に呼びかける声。

その直後、急な風が頬を撫でる。

まるで外で何かが起きていることを明確に見えていない僕に表すかのように。

「行くぜえ…泣いて震えろ！これがアタシたちの合作！複合結界、殿竜死試合!!」

そう真ん中の子の声が聞こえた瞬間、外から強風が屋敷の中へと吹きすさぶ。

確実に、外で何かが起きている。

冷泉様の時では感じなかった感触。

まるで外に別の何かが出来ているような。

西条不知火の声を聞かない。

大丈夫だろうか？

でも見に行くのは…。

そう逡巡しながらも、結局ゆつくりと門の方に歩みを進めていく。

そしてすぐ目の前まで到着した。

その直後、外で何かが碎けるような甲高い音が鼓膜を揺らした。な、なんだよ……マジで外では何が起きているんだ？ 冷泉文代の時とは違う。

これは一体、何が違うんというのか……？

戸惑っていると、突然門が叩かれる。

ギョツとして門を凝視していると、もう一度門が叩かれた。

「おい、終わったぞ。開けろ。」

「あ……あ、はい。」

その声は西条不知火その人。

どうやらもう終わったらしい。

もう!?

相手は3人で、何かをやっていたみたいだけど……。

そう思いながらも門を開く。

すると、そこには一面煙を上げるアスファルト。

もわつと伝わってくる熱気と地面から揺らぎ出る陽炎。

そこらへんに横たわっている3人は煤で汚れてあたかも火事現場で逃げ遅れた所を救急隊員に助け出されたような有様だ。

そして、不知火は視線を他所へと一瞬逸らすとこちらに手を合わせた。

「わりいな、仕事増やしちまった。まっ、取り敢えずこれで全部終わったから仕事に戻ってくれ。一応、道路とかに付いている煤を取ってアスファルトに水を撒いていてくれよ。」

「わ、分かりました……あの……！」

あの3人は声だけしか判断材料がないがなにやら大掛かりな何かをしようとしていた。

それをものの一瞬で制圧したということだ。

彼女は、一体何をやったのか。

好奇心からそれを聞こうとするも、彼女は手を突きだして制止する。

「悪いが質問は遠慮してくれ。このあと用事があるつつつたよな。あ

いつらの後処理をしないといけないことを考えると、あの3馬鹿のせいで結構時間押してんだ。言い方は悪くなってしまうが、何も言わずにとにかく事に戻れ。」

「は、はい……。」

確かに学校を休んだ理由が家の行事だと言っていた。

それならば彼女たちをまともに相手取るのは時間を取られてしまおうだろう。

後処理って何をするかは分からないが、極論を言えばこれは退魔師同士の話。

僕には、あまり関係がない。

西条不知火はぐったりとしたあの3人を引きずりながら門の中へと入っていく。

そして僕は門の外に出た。

そこだけムワツと気温が高い。

うだる暑さだ。

それが何故かはわからない。

けれど、ゆっくりとハンカチ越しにバケツを持った。

バケツは……暑くない。

これなら持てるな。

まずは水撒きだな、これじゃ暑くて仕事にならん。

そう決めると僕はバケツを手に、また門の中へと足を踏み入れた。

◇

「つかれた……。」

あれからまた1時間半かけて掃除を終えて、現在は事務所。

あの後、あの3人は似たような馬鹿への見せしめということとで門の前に縛り付けられていた。

まあ、目を覚ましていたが西条不知火への怯えやへりくだりやらでうるさかったものだ。

骨の髄まで小物臭かった。

まあ結局行事の邪魔になるって理由で口に猿轡噛ませられていたけど。

多分、彼女の方が家柄が上なので特段問題になることはないのだろう。

向こうから吹っ掛けて来てるわけだし。

そんでもって僕の手には分厚い封筒。

中身はお金。

なんでも頑張った甲斐があつて、仕事振りを評価してもらったのだ。

…それと多分あの3人との会話が聞こえていたらしく、3人の退魔師にも退かずに仕事を為そうとしたところにプロ根性を感じたとも言つていたか。

そんな大した理由ではなく、プロ根性なんかあるわけないのだが… まあそういう意味ではあの3人のおかげで余計に金に色が付いたのだから感謝だな。

封筒を懐に仕舞う。

すると、事務所のドアが開かれた。

「ふう〜疲れたあ〜」

「今日、飲みに行きましようよ。」

「その前に菓子折りとか買いに行かないとな。」

先輩方だ。

汗を掻いている様子で、一仕事終えてきたって感じだろう。

僕は立ち上がると、頭を下げる。

「お疲れ様です。」

「おつ、戻ってたか。そっちもお疲れ様。西条邸への清掃、大丈夫だったか？」

たか？」

内藤チーフは頭を下げる僕に声を掛けてくる。

問題は… まあなかったな。

僕と西条様との間で特にトラブルが起きたわけではない。

トラブルはあの3人の来訪だったわけだし。

それに西条不知火は高町先輩が言う程、ガラが悪い人でもなかった



な。

見た目とか喋り方くらいでまともな人ではあると思う。

「大丈夫です。西条様からもまたの機会があつたら頼みたいと言われました。」

「そうか、よくやった。それじゃ、今日は解散してもらつて構わない。また明日な。」

「はい、ありがとうございます。……ところで、高町先輩はどこへ？」

頭を下げるも、とあることが気になった。

入ってきた面子に高町先輩が居ない。

僕が仕事に行く前は居たのにも関わらず。  
トイレかな……？

そう思っているときつきままで着替えをしていたり、スマホを見ていたりと思ひ思ひの時間を過ごしていた先輩方が顔を合わせる。

それは何とも言えない空気だった。

なんだ……？

心中で首を傾げていると、内藤チーフは頬を掻きながらもゆつくりと口を開いた。

「あゝ……高町……な。そのくアイツは今……病院に搬送されている。」

「えっ……!?!」

病院。

病院ってあの病院か？

怪我したり、病気になるったりしたら運ばれるあの病院？

一体どうしたというのだろうか。

確か、今日は先輩方は淫妖界という所に仕事をしに行つたんだっただけか。

そこで何かがあつたのか？

「中の制圧はしつかりされてたんだけどな。どうやら肉壁から引きずり出した女性の胎内にまだ生きが良くて十分に成熟した奴が居たみたいだな。引きずり出した時の衝撃で活発になつて腹食い破つてガブリさ。」

中鉢先輩がこちらを見て、そう教えてくれる。

つまりは高町先輩はその妖に襲われたということだろうか。

だとしたら搬送となるとかなり一大事なんじゃ。

もしかしたら命だって危ういんじゃないや……。

「おい！悪戯に不安を煽るな！……命に別状はない。ただ右手の小指と薬指を噛み千切られそうになったただけだ。ちゃんと処置を受ければ完治して生活にも支障は出ないだろう。」

右手の小指と薬指を噛み千切られるって結構重大だと思うのだが……。

僕も着たことのある防護服かどうかは知らないが、防護服ってのは結構厚くて丈夫な素材で出来ていたはずだ。

アレを通して指を噛み千切りかねないなんて、どんな牙と顎の力をしているのか分かったものじゃない。

……もし、僕が淫妖界に居たら。

こうなっていたのは僕かも……いや、慣れているはずの高町先輩でも負傷しているなら、僕は一体どうなってしまうのだろうか。

なんというか人としてよろしくないかもしれないが、僕じゃなくて良かった。

新人で良かったし、なんなら普通より多く金もらえるのに何も危険のない仕事を宛がわれて良かった。

それでも、その安堵は直ぐに掻き消える。

だって人はいつまでも新人ではあり続けられないのだから。

いつかは僕も淫妖界とか、新人には宛がわれない危険度の高い仕事をしないといけなくなる。

それは揺るがない事実だ。

いつかは危ない目に遭うことが分かる見えている地雷のような仕事。

そんでもって退魔師に下に見られている。

いつまでも、この仕事に就いていて良いのだろうか？

……そんなことを考えて、無駄だということに気づく。

僕は施設の人の紹介でこの仕事に就いた。

でも、それは何故だ。

紹介なら断ることだってできたはずだ。

それは、給料が良いこともあるが僕が就ける仕事でそんな『良い仕事』はなかったからだ。

この仕事をやめて、自分がやっていけるかなんて自信がない。

人間関係だって職場の人とはうまくやっていける。

それを手放すのは惜しい。

要するに、僕には端から選択の余地がなかった。

命あつての職種とは言われるが、現代にあつては金がなくては質のいい生を送るのは難しいだろう。

クオリティオブライフという観点では文化的な生活にはお金がどうしても必要である。

世知辛いけど……それが事実だ。

「まあ、とにかくアイツは大丈夫だ。だから今日は帰りなさい。明日の出勤時間はいつもの通りだ。」

「分かりました……お疲れ様でした。」

帰りの用意を済ますと、先輩たちに背を向けて事務所から出る。

なにせよ、仕事終わりに未だ来ていない未来の事を考えるのは良そう。

余計に疲れるだけだ。

まあある程度お金を貯めたらすっぱり辞めて、さっさとどっかに隠居してゆっくり暮らすとかでも良いんじゃないか？

株とか始めても……いや、それは流石によくわかんないしまずいかな。

そんなことを考えていると、ふと冷泉文代との会話が頭に過る。

『なんていうか、こんな自分でも役に立つ場所……っていうのが、こういう職種しかなかったから……ですかね？ははっ、なんか照れくさいな……』

冷泉文代になぜこんな仕事をやっているのかと聞かれて言った言葉だ。

はつきり言っただけ今思い出すと白々しいのを通り越して片腹痛いし

恥ずかしい。

中学生の女の子相手だからってカッコつけてるんじゃないよ、まったく。

…ただ、それでも。

「…そんな風に、思えたらもつと楽しいだろうな。生きてて。」

自分の仕事に誇りを持てるってことはとても幸せなことだ。

だから、なんていうか…そういうのにどこか羨望やら憧憬に似た物を覚えるのも事実なのである。

だってそういうの、僕の今まで生きてきた時の中では縁のない物だから。

今回の件でも痛感したが、退魔師はやっぱり人間性が良い人ばかりじゃない。

僕のような非退魔師や同じ退魔師でも家柄の有無でも見下したりする。

それに、なまじ霊術とか使えるから今日みたいにオラついでる奴も他に居るのだろう。

それでも、多分自分が退魔師である…というか自分が自分であるということに誇りは持っていることは分かる。

そこは、なんか羨ましいな。

「お金、一杯もらえたし…今日はいつもより少しだけ豪華な食事にしてみようかな。」

いつまでも沈んでいちゃしようがない。

幸いお金は沢山もらった。

だったら自分の唯一の楽しみである食事にお金を少しだけ掛けてもバチは当たりはしないだろう。

明日が仕事だからお酒を控えめにしないといけないのは残念だけれど。

そうと決まれば、青年は渡り廊下を歩いて玄関口へ向かう。

はらりと自分のジャケットから落ちた長く艶やかな烏羽玉の毛には気づくことなく。

## 八尺

百貨店。

沢山の人がこれまた沢山の店を巡り、思い思いの時間を過ごす中。一人の女性が焦燥感に駆られた様子で辺りを歩き回っている。

「翔太ー…どこなの翔太ー!!」

子供の名前を呼び、周りをしきりに見回す。

周囲に人が居るのにも関わらず、声を張り上げる様はなりふり構わずといった様子である。

人混みに紛れて自分の息子が消えた。

それは親にとってみれば一大事だ。

周囲の人間はそんな声を張り上げる女性が居ることに驚き、視線を向けはする。

しかしそこから声を掛けるなど協力する姿勢を見せる人間は中々現れない。

力にはなれないと自分で理解したつもりなのか、躊躇っているのかそれとも面倒事に関わりたくないのか。

多くの人たちは通り過ぎる。

(もしかして外に…? いや、でもいくらあの子でも外に出るとまずいってことは分かるでしょうし…。もしかして6階のおもちゃ売り場? それとも4階のペットショップかしら…。)

どこに行ったのか頭をフル回転させて考える。

そんな中、不意に背後から肩を叩かれた。

振り返るとそこには一人の女性が立っていた。

黒髪ボブに泣きボクロ、そして眼鏡をかけていてどことなく妖艶な雰囲気醸し出している女性。

体躯やスタイルからまるでモデルのような立ち姿で伶俐な魅力を持っていた。

(わあ… 綺麗な人…。… じゃなくて! 一体何の用なんだろう…)

こっちはそれどころじゃないのに!

「は、はい… なんですか?」

息子を探している途中に足止めを喰らってしまったことに更なる焦りと苛立ちを覚えながらも、それを表に出さずになぜ声をかけたか問いかける。

するとその女性は印象とは違い、おずおずとした様子で話しを切り出す。

「あの…： さっき一人で歩いている小さな男の子を見かけたのでもしかしたらって…：」

「ほ、本当ですか!?!ど、どこで…： !あのっ、その子はアニメものの…： 黄色いキャラクターのポーチを持って、チェックの服を着てるんですけど!」

一人で歩いている小さな男の子

それを聞いて女性はその男の子が自分の息子だろうと彼女の話に食いつく。

小さな子供が一人で闇雲に長い距離移動するとは考えづらい。

興味惹かれる物へと心のままに向かっているのか、それともこの階にまだ居るのか。

息子の特徴を言っただけで本当に息子か確かめながらも、どこで見たのか尋ねる。

すると、女性は真面目な顔で頷くと指差す。

「だったら間違いなくその子だと思います。あちらの方のトイレと喫煙所がある所でずっと自動販売機を眺めていました。」

「あの子、ジュース飲みたかったのかしら…： 言ってくれたら…： !あのっ、教えていただきありがとうございました!いってみます。」

「いえいえ、私も母親ですから。お気持ち理解できますよ。」

息子の居る場所を教えてくださいました彼女に頭を下げながらも、女性はそちらの方向に歩みを進める。

段々と小走りになる歩み。

ここでもたもたしていたらまた見失ってしまうかもしれない。

フロアの中でも外れの方。

そんな一角へと辿り着く。

息を切らしながらも、入っていく。

トイレの入り口を通り過ぎ、押しボタン式の自動ドアの前。

「はあ…… はあ…… 翔太…… あれ……？」

女が付いた頃には、子供どころか人っ子一人居ない。

(そんな…… いや、だったらもう迷子センターに行……)

「あら、結局見つからなかったの？ 情けないわね、母は強しって言葉はあるけれどそれもお母さん次第ってことかしら？」

せっかくの手がかりが無駄足で終わったことに落胆しながらも、冷静に次に取るべき手段を考えていると聞き覚えのある声が背後から聞こえる。

振り返る。

すると、そこには先ほど息子の居場所を教えてくれた女が一人。

しかし、肌色が目に入ってその女が一糸纏わぬ姿であることに気づいた。

「貴方!? 一体何をやっ…… えっ?」

女性が服を着ていないことに気づいて、ギョツとする。

そしてそれを咎めるような声を出すも、その女の姿をしつかりと目に収めると言葉を失った。

乳房に当たる部分にはそれぞれ大きく開かれた口。

その二つの口はまるで目の前の呆けた女を嘲笑うかのように笑みを浮かべている。

そして、下腹部の割れ目…… 女陰からは蛇のように長く真っ赤な舌がだらりと地面に垂れ下がっていた。

明らかに常人離れした姿。

趣味の悪いクリーチャー絵のような有様だ。

それが何かは理解していないのに、膝が震えていた。

本能的に、それが自分にとってどれほど危険な存在であるか察知したかのよう。

「でも安心しなさい。私が強い母親に産み直してあげる。そうね…… 次は人混みでも見失わないように背を伸ばしましょうね?」

そう言っつて、掌を合わせると下腹部へと持つて行ってハートマークを手で作って宛がう。

その瞬間、ぞわりと背筋に怖気が走る。

身体に触れている空気が絡みつくような不快感。

この場から逃げ出さないといけない。

それが分かっているのに、足が震えて動かなかった……。

そんな彼女を見つめて笑みを浮かべると、女は紡ぐ。

その名前を。

「術式解放……魔胎姦母転誕。」

人気のない外れで濡れた肉が擦れた水っぽい音が響いた。

「欲しい！欲しい欲しい!!みんな持つてるもん！持つていないの僕だけだよ!？」

ゲーム売り場。

一人の幼い少年がバタバタと足を動かして駄々を捏ねる。

しかし、傍らに居た母親らしき女性は溜息を吐くと相手にしない。

「あのねえ…よそはよそ、うちはうち。何度言ってもダメな物はダメメツ！」

「えええー！ー!!」

ダメだと言っても聞き入れる様子がなく、その場で買ってくれと言うまで動くつもりがないと少年は視線で意思表示をする。

そんな少年のやり方は既に何度か経験しているのか、母親は呆れた様子で踵を返す。

そして彼に背を向けた。

「そんなに他所のことを言うんだったら、そのままどこか他所の子にでもなっちゃいなさい。お母さん、もう知らないからね!」

そう言っただけではあるが歩き出す。

こうすれば、自分の子供は慌てて立ち上がって駆け寄ってくると知っているからだ。

数歩歩く。

そこで違和感を覚えた。

いつもならば、ここまで歩けば待つてと駆け寄ってくる。



今日は手ごわいなと言わんばかりにやれやれと肩を竦めて振り返る。

「ぼ…ぼぼぼ…。」

「があ…おがあぎ…。」

そして、目の前の光景に絶句した。

成人男性の背すらも超えていそうなほどの背丈の女。

髪が腰まであって、顔に掛かって見えない。

しかし、微かに病的な白い肌と口のような小さな穴が髪の間隙から除く。

なにより、最も目を引くのは頭からまるで帽子を被ったかのように左右に骨のような物が出張っている所である。

そして、そんな奇妙な女はぼぼぼ…と不気味な音を穴から発すると強く少年を抱き上げている。

パキ…バキ…と人体から鳴っていけない音が空気を揺らし、

口から血液が泡立った状態で湧き出てくる。

顔の色は最早紫色。

それなのに、まるで女は我が子を慈しむようにほおずりをする。

「カケルっ!!!」

助けを求めるように視線を向ける自分の息子を助け出さんと駆け出す母親。

しかしその瞬間、ブチブチブチリと繊維が引き裂ける音共に少年の上半身が重い音を立てて地面に落ちた。

「あ…あ…あああああ!!!」

理解できないと言った様子で呆けた声を出すも、残酷にも段々と目の前で起きたことが現実であることを理解する。

そして、母親は最愛の息子を目の前で無惨にも喪ったことに悲鳴を上げる。

それが、このフロアにおける阿鼻叫喚の始まりだった。

◇

「いいか、もう一度行程を確認する。もう一度やってみろ。」

「はあ……。」

平日の朝。

昨日の休日に出勤しなくてはいけなかったのでいまいち休んだ気がしない。

そしてそんな中、チーフの目の前でオナホールに機材を入れ込んでいる。

そう、オナホールになんか棒みたいな機材を真面目な顔で入れているのである。

しかもこれ二回目だ。

他人から見たら異常行動以外の何者でもないだろう。

しかし、これもれっきとした仕事……というより仕事を行う上での確認事項や教練に近いのだ。

僕はオナホールにずぷりと棒を突き立てるとそのまま中へと入れる。

そして取り出すと、チーフの顔を見る。

「これで計器の数値が0であれば問題なし、1以上であれば妖の種で受精していると記録します。故障があればエラーという文字が表示されるのでその際は遺体から離れて周囲の安全を確認。連絡を入れて新しい計器が届くまで異常が起きないか監視し、起きた場合は全体に報告して即刻対処に当たります。」

「うむ、完璧だ。これなら高町の代わりも務まるだろう。」

そう、今僕は高町先輩が担当している業務の代わりを務める為に機材の使い方を教えてもらったのだ。

昨日僕も仕事があったように先輩たちも仕事があったのだが、その際に淫妖界における仕事で高町先輩が負傷して病院で治療を受けているのだ。

だからこそ、高町先輩の業務を誰かが代わりに行う必要がある。

よって僕に白羽の矢が立ったというわけだ。

なんでもいづれ新人を脱却して、様々な業務を任せることになる。

よって良い機会だからと高町先輩の業務を代行することになった

のだ。

新人が入ってきた際に運搬しか出来ないと困るし、何事も経験だと。

どちらにせよ危険な仕事にはまだ新人である内は連れていかれないし、まあいい。

問題は、業務内容である。

高町先輩の業務は主に被害者の調査だ。

それも女性であれば、今行ったことをしなければならぬ。

言うならば死体や抜け殻のアソコに棒突っ込まなければいけないのである。

… なんとというかやりづらい。

ネクロフィリアや意識のない女性が嗜好な人材であれば喜んでやるだろうが、僕はそうではないのだ。

「どうしたよ？ 得な役回りなんだからもっと喜んでみるよ。ほら、仕事の度にマ○コに棒状の物をつっ込めるんだぞ？」

中鉢先輩は後ろからニヤつきながら僕の肩を叩く。

新しい仕事をする事になったイジリなのだろう。

まったくこの人は…。

男から男へのセクハラって成立するのかな？

「… 別に意識のない女の人に興奮なんかしないですよ。大抵死体とかにやるわけだし、そんなので興奮したらネクロフィリアですよ。なんか人間性として難があるじゃないっすかそれ。」

僕ははつきりと先輩に対してそう断る。

すると、中鉢先輩はどこか気まずそうに眼を逸らす。

「あく… それ、高町の前では言うなよ。」

「え…。」

え… あの人興奮してたのか。

怖…。

割とお世話になっている先輩だけあって、衝撃はひとしおだった。

あの人… マジか…。

接し方が分からなくなってしまうな…。

「まあそこまで気負わなくても良い…… あつ、SSR出た。爆死して  
る奴にスクシヨリプしよ。」

ロツカーに背を預けていた坂本先輩はこちらに視線を向けて僕に  
声を掛けようとするも、すぐにスマホに視線を戻した。

なんというかマイペースな人で、いまいち掴みどころがない。

まあでもなんとなく性格が悪いことは分かるのだが。

すると、事務所の内線が鳴る。

チーフがそれを受け取ると、一言二言返事してから頭をペコペコと  
下げた。

…… 多分、相手は本部だ。

十中八九、清掃の仕事が入ったのだろう。

そしてチーフが受話器を戻すと、こちらへと視線を向ける。

「歓談している所悪いが、仕事だ…… 葦矢、機材を忘れるなよ。」

「は、はい……！」

チーフの言葉を合図にさつきまでこちらをヘラヘラと弄っていた  
先輩方が準備を始める。

その切り替えの早さは流石は先輩と言ったところか。

「うええ…… マジかよ……、周回しようと思ってたのに……。」

「いいからさつきと着替えろ！」

坂本先輩はぶーたれていたが。

なんというか身体だけ成長した中高生のゲーマーの子供のような  
光景だなあ。

彼の様子を見て、そう感じた。

現場はシヨツピングモールの6階。

ゲームおもちゃなどホビーをこの階では取り扱っているようだ。

いつもならばその品揃えから人々を魅了しているであろうフロア。

しかし、今や惨憺たる有様だった。

「…… あ…… ひでえなあ……。」

中鉢先輩が独り言ちる。

そこはまるで臓物の海。

バラバラの人間の一部分がそこらに転がり、床は赤黒い水たまりが出来上がっており、皮脂が溶けだしたのか膜張っている。

内臓なんか売られている玩具や棚に掛かってやがる。

まるで地獄をこの階に敷き詰めたかのように見るに堪えない有様だった。

「当フロアに居た従業員含めて25人死亡。この階に居た人間はみんな余すことなく殺されている。」

「… 久々にえぐい現場だ。葦矢、大丈夫か？」

いつもはのほほんとした坂本先輩が珍しく苦々しい声を発しながら、こちらを心配する。

それだけこの現場は酷いと言うことだろう。

確かに、見ていて心良い物ではない。

だが、グロ耐性あるからとかイキリ散らかした中学生のようなことを言うつもりはないが見ているだけで吐きそうとかそういうのはない。

この前の下水道なんかとは比べ物にならないくらい胸糞悪い光景なのは確かだが。

そして、加えてなんとというか…。

「…。」

冷泉文代に見られている。

何故居るのかと言えば、この現場を制圧したのが彼女だからといったことに他ならない。

しかし、それにしたってなんでずっとこつちを見ているのだろう。

ただでさえこの光景で精神的にきているのだ。

過敏になってしまって、気になって仕方がない。

でも、ここでそれに触れてしまうのはおかしい。

だって僕はただの一清掃員である。

立場が上の彼女に対してどうこう言うのもなという話なのだ。

先輩たちは真剣な顔で話している。

… ここは気づかないフリで先輩たちの話を聞こう。

しばらく経てば別の方向に向くだろう。

なんならこつちを見ているというのも僕の考えすぎかもしれないしな。

「これがこんなことを……」

「2m80cm……くらいか。結構デカいな。そりゃこんなのが老若男女ちぎっては投げしてたら壮観だろうよ。」

坂本先輩は唾然としており、中鉢先輩はこの惨状の原因である妖を見て皮肉を言いながらも睨みつけている。

その妖は2m以上の大柄の女のような物。

しかし頭の左右から骨が突きだしてまるで麦わら帽子を被っているようであったり、長い髪の間から何も入っていない眼窩と口と叫べない程に小さな穴が顔についている。

着ている服は丈足らずで血で真っ赤に染まっていた。

……そもそも妖が現代の人間らしい服を着ている光景なんか初めて見るのだが。

「今まで俺はこの仕事を続けて長いが、こんな妖は見たことがない。ただ聞くに、監視カメラの映像からこの妖は優先的に子供を襲っており、その子供の近くの大人も共に殺していたようだ。」

「子供狙うとか随分と陰険じゃねえかクソ妖……。」

中鉢先輩は苛立たし気に妖を見る。

そして、それは概ね僕も同じ気持ちだった。

子供と言えばまだ成長も未発達で弱い。

しかし、陳腐な言い方をすれば次の世代を担う宝である。

それを優先的に襲うというのはまるでなんというか……浅ましさを感ずるのだ。

……それにまあ、天涯孤独で親を見たこともない僕が言うのもなんだが自分の子供が死ぬなんて耐えられないだろう。

絶対に許されていいことではない。

「この仕事に来た時に、上層部の方も退魔師からの情報を受け取るもこの妖が何かは現状分かっていないようだ。今回のサンプルから研究を始めれば決まるのかもしれないな。」

「名前はなんにせよ、自分らは掃除をするのみ。ですよね、チーフ。」  
坂本先輩は妖から視線を外して、チーフに問いかける。  
すると、チーフは首を縦に振った。

「ああ。その通りだ。それじゃ俺と坂本でフロア洗浄。中鉢は妖の回収。そして葦矢は……まあ、被害者の身体もバラバラで妖も種を撒くタイプとは思えないが、一応被害者女性の調査と回収を頼む。もしかすればこの場所に逃げられただけで別の妖が居たかもしれないし、状況の把握には役に立つかもしれない。調査の際は……この有様だ。部位で分かれたせいで誰の物か特定は難しいだろう。特徴とカメラの撮影データを帳簿に載せる。それと回収も同じ理由でもう容器に」

「わ、わかりました。」

明らかに被害者の身体はバラバラで下半身がそのまま転がっていたりするので明らかに妖を育てる為の母体にはなり得ないと思うが、どんな性質を持っているか分からないのが妖である。

マニュアル通り、職務を行えと言うことだろう。

……しかしこの落ちている一部分を拾い上げて棒を突っ込むってことか？

結構キツツいな……。

「……今日は四柱ごと冷泉様が監督為されている。なに、気負うことはない。いつも通り可能な限り迅速にスムーズに、そして一つの掃除漏れもないようにすれば大丈夫だ。それじゃ、みんな仕事に掛かれ。」

「了解」

チーフは一瞬後ろの冷泉文代に視線を向けるも、こちらに向き直る。

そして、僕たちもチーフの言葉を合図に仕事へと取り掛かったのだ。

手には帳簿と計器、首にはカメラ。

肩に掛けるはこの前妖を保管した際に使用した金属製の容器。

転がる死体は無秩序に散らばっている。

だからこそ、闇雲にやってはキリがないだろう。

なので、フロアの左から右へと調査と回収を行っていくことにしよう。

しかしそれにしたって……。

「ここまで大規模だと隠すのは大変だろうな。」

ここまで派手に殺していると、下や上の階にも断末魔は聞こえていただろう。

確か前の下水道で記憶処理とか聞いたし、それでこの百貨店に居た人間のアフターケアしてるんだろうか。

僕もはつきりと妖の存在について知ったのはこの仕事に就いてたからだし、隠しているのは確定しているのだが。

だとすれば、今回の事件は後処理を担当している人達からすれば溜まった者ではないだろう。

もしかすればデスマーチしているのかも。

目の前の惨状から目を逸らすようにそう考えていると、フロアの左端へと到達する。

左端ではアケコンやらレトロゲーのリメイクに腸がべつたりと乗っている。

そして廊下に転々と人の右腕や上半身、下半身など。

「……。」

一度合掌しつつも、カメラを取り出してそれらの部位一つ一つを撮影する。

人の死体を写真に残すのはなんとなく憚られたが、これも仕事だ。

ただ罰当たりではあるので、一応手を合わせといた。

「さてと……女性の下半身……があります、ね……。」

多分元々の生地は白かったのだろうが、血を吸って赤くなったスカート。

奇妙にもそれを身に着けた下半身がそこに落つこちているのだから頭が痛くなる。

こんな光景、この仕事に就いていないと目にする機会すらないだろう。

「ご丁寧にも両足をもぎ取られてやがる。」



これに棒入れるのか……。  
やだなあ……。

そう思いながらも、それに歩み寄るとスカートをはき、いでいく。  
スカートを剥ぎ取るとそこには血で汚れているも紫のショーツを履いていることが分かった。

割と遊んでいる女性だったのだろうか？

……いや、ただの偏見だなこれは。

それに、死体見て遊んでいる女の人だったのかなあとかぶつ壊れてんのかつて。

いちいち吐いていたらキリがないとチーフが言っていた。

でも死体見てこんな感想が思い浮かぶなら慣れることは必ずしも良いことではないな。

そう思いながらもショーツをはぎ取る。

そして露出される女性のアレ。

それを見ると足も丁寧にもぎ取られているだけあつてか朝に見たオナホと一瞬被った。

うわ…… 今のは流石に気分悪い。

さつさと終わらせるか。

いち早くこの遺体をケースへと入れる為にも計器の電源を入れる。

そして割れ目へと計器を朝に練習した通り差し込む。

練習とはちがつて、肉を搔き分ける感触がして気持ち悪い。

この仕事、結構きついな……。

高町先輩はよく流れ作業でやってたもんだ。

それが経験による慣れと言った物だろうか。

暫く待っていると、棒が振動する。

測り終わったか。

取り出して見ると、0の文字。

陰性か…… まあ、そりゃショーツ付けてたし、そもそもあの妖はそ

ういう人を苗床にする系の物ではないみたいだし当たり前か。

そう思った瞬間。

「……なに、……してるの……？」

背後から鈴を転がしたかのようにか細い声がした。  
背筋がぞわりと粟立つ。

その声の主を、僕は知っている。  
ゆっくりと振り返る。

するとそこに声の主は確かに立っていた。

「もう一度…聞く。何を、している？」

冷泉文代。

冷泉家の次女にして、退魔師。

そんな彼女が僕を冷たい目で見下ろしていた。

…よくよく考えれば女性の下半身の死体の衣服を剥いで局部に  
棒突っ込んでいるってやべーな。

しかもそれを中学生女子に見られていると来ている。

…アレ、すつごくヤバイ気がするぞ。

今すぐにも弁解しないととんでもない誤解をされる気がする。

だってなんか圧のような物を彼女から感じるもん。

「い、いや！これは仕事で妖に種を仕込まれているのか調べる為に  
行っているんですよお！だから僕は…。」

「そんなことは…知ってる…。」

狼狽える僕の様子など知ったことではないと言わんばかりにきつ  
ぱりと言い切る。

まあ、そりゃ知ってるか。

曲がりなりにも彼女は僕よりも数段上の立場であって、僕よりもこ  
ういう現場を見てきたであろう。

なんなら高町先輩がやっているのも見ているだろう。

テンパってそんな少し考えればわかることも頭から抜けていた。

「そうじゃなくて…なんで、貴方がそんな仕事…してる、の？」

どうやら僕がこの仕事をやっている理由を聞きたかったらしい。

新人がこの仕事をしている理由が気になったのだろうか？

まあ、なんにせよ誤解されているわけではなさそうだ。

…それならなんでこんなにも話しているだけなのに圧を感じる  
のだろうか？

「あ、あの… 前任者の高町先輩が淫妖界での仕事で負傷して… それで経験を積むいい機会だからと…」

「… そう。」

説明すると、納得したのか返事をして黙りこくる。

… やっぱりなんか変な子だなあ。

口には絶対に出せないが、そう思いつつも帳簿に情報を書き込んだ。

さて、次の死体の所へ行くか…

立ち上がると、歩き出す。

目の前に今度は少し小さめの女性の下半身がある。

道中の腕やら男性の死体やらも撮りながら進むとしよう。

見る限り、この列はあの女性の下半身はさっきのと目の前に見える奴しかないみたいなので、アレを調査したらまずはこの列の死骸を回収するか。

そう思つて一歩二歩と歩みを進める。

「…」

そして、何故か背後で冷泉文代も同じように歩みを進めていた。

… ん？

足を止める。

すると、ぴちやぴちやと背後で響いていた血だまりを踏みしめる足音も止まる。

… これ、明らかにいついてきているよな？

「… えーと、なんですか？」

「なに… が？」

振り返つて何の用か尋ねると、彼女は首を傾げる。

いや、首を傾げたいのは僕の方なんだけど。

「いや、なんで付いて来ているのかなって…」

「見られてまずいものとか… ある？」

彼女はジト目で僕を見つめてくる。

なんで僕が詰められているんだよ。

「……別にないですけど。」

「なら良い……。早く仕事に、取り組んで……。」

そう言つて無言でこちらを見つめる彼女。

いや、よくはないだろ。

……もしかして、この子暇なのか？

よく考えてみれば、この現場では彼女は監督してるだけ。

つまりは何かトラブルが起きない限りは何もすることがない。

……これは、本当に暇説が濃厚になってきたな。

だとすればこちらは仕事をやっているのに良い御身分であるが。

「どうやらこれ以上は会話する気がないようだ。」

まあ、僕自身も仕事がある。

気にせず、死体に歩み寄ってしやがみ込む。

そして衣服をはぎ取ると、棒を局部に入れこんだ。

「……。」

背中に視線を感じる。

…… やりづれえ……。

暇なら暇でどつか別の所に行つてくれないかなあ。

その思いも虚しく、再度僕が歩みを始めると背後でも足音が聞こえ

てくるのだった。